

山口剛著作集 第三



山口剛著作集 第三卷

定價三八〇〇圓

昭和四十七年三月一日印刷

昭和四十七年三月五日發行

著者 山口 剛

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二—一
電話(五六一)五九二二
振替東京三四

目次

明和の一人

五

洒落本について

一五

洒落本の本質

二八

洒落本展望

二九

黄表紙について

三二

黄表紙の本質

三六

黄表紙の一特質

三七

京傳黄表紙に關する一小論

三八

山東京傳と黄表紙

四〇

黄表紙から合巻へ

四六

京傳の商賣氣

四三

黄表紙繪趣向推移の一様式

四六

黄表紙に現はれた廢顏味の一例

四三

江戸の文化生活

四八

假廓吉原

四七

編集後記

五七

江戸文學篇三

明和の一人

淀の川船

上りの船が十三里、下りの船が十三里、その十三里を載せて行く京の夢、大阪の夢の相の様々を、見るとしなく、見ずとしなく、用があると云ふでも、無いと云ふでもなく、上り下るも月に二度三度。

今宵またしても、伴も連れず、路侶もない氣やすさを、三人前買ひ切つた胴の間の横木に凭せかけて、ここ三日四日、小鹽山は松一本なる長嘯子の墓詣、嵯峨野めぐり、さては叡山の麓を一乗寺村に抜けて詩仙堂のおとなひなど、興に驅られた逍遙にも、流石疲れを覺えた足を斜に伸ばせば、藍の香しめやかな奥綺の初袷の肌觸り、後手にぐつとしめ直す鼠繻子の帶の高鳴り、ふと目に入る足袋の甲の薄ら汚れも、ここの伏見まで駕籠で來たものと思ひかへせば、扱は京の清遊の名残りかと、我知らぬ微笑が口の端に上る。

「コレ船頭衆、仕切を随分緩りと取つて、氣を附けさんせ」と口早の聲高にいうて退ける船宿の女房、「また御機嫌よう」と繰り返す紋切形を、編蓋の縁に手をかけて慰懃に受ける旅侍、それを傍なる道頓堀者らしいきいた風なのが、くすりと首を締め様に笑ふその眼が、伴の中間の敷脱と、ばつたり出合つたどきまぎの折柄。誰やらが、昔は鬼の様な船頭共が、當今は下り船などには、板締の繻絆着て黒縮緬の頬被り、日和が悪くば乗らぬ

事と笑うたそれとはひきかへ、刺青の猩々に味を見せたのが、雙の腕に力を凝めたる棹の一突き。船は最早棧橋を離れて、するすると澄み渡つた水にうつる夕映、影淡き燈火の光、さては見送る人の影を亂さずに行く。岸の柳はいつ散りそめたとなく、散りそめたが、三葉四葉はらはらと風なき空を舞うて、胴の間に入りくるを、あれあれと珍しさうに、鬚の上に、肩の邊に赤蜻蛉抑へる手つきのやんわりと拾ふのも、何處かしら軽いきさくな心になり勝な乗合船の習慣であらう。

伏見の城の昔の跡を偲べといふのか、兎角旅人が氣にする京橋の北詰なる櫓もどきの建物、隴の夕靄に消えそめた頃は、間もなく十一日の月明り。町の燈を一つ宛薄らげて行くその光の中を行く事やしばらく、燈影はまた花と多かる淀の町。大橋の上にきくからころの下駄の齒音は、夢といふけぶな者が轉び行くのかと思はれる。その町端に見ゆる松の樹の間の瀟灑たる一字の茅葺は、ここなる城主の御茶亭と承れば、釜の中なる松籟も通ひ來るかと思はれる。それ程の静けさを誰やらが「あれ、夜網をうつつて居る」といふ。背延びしたり立ちあがつたり、船を一揺り揺めかした騒ぎのあとを、舳から船底傳ひに、ひたひたと忍ぶ様に這ふ様に音なして、漸く伸して居る足から腰の邊に纏ひつくと聞くうちに、いつか解けて、ほどけて、微に艫の方へと迂り行く。何ものの仕業かと、小首傾けながら見上る彼方は千兩堤の松並木の美しさ。

さき程までは「これは絶景、これは好景」と何々宗匠と名乗つて、半時庵から文臺許されたさうなのが、頻りと、わざとらしい嗟歎の聲を上げて居つたが、いつか轉寢のたわいもなくなたつた後も、絶景は絶景を伴ひ、好景は好景を誘うて來る。たとへば淀の川瀬の水車、さしわたし八間有余の大事の軸のくるりくるくと、此の大繪巻物を繙くといふのであらうか。それとも四條河原や、道頓堀やらで、よく舞臺で見せる夜船の場。京橋から八軒屋までの書割の引道具ともいひうか。もしもその引道具を正で行くとならば、康熙帝の言草の、月はさし當り

の百目蠟燭、堯舜の旦湯武の末、操莽の丑淨、古今來許多の脚色をそのままとらば、彼方の隅に、月の光をさへ苦蔭にはづして居る二人連、義理と情とに揉まるる思ひは、もう花薄の穂に出でて、いづれは浮名を繪雙紙に流す道行と趣向立に取りかからうか。此方には高雄詣での親子づれ、窮屈さうにやつと横坐に寛ぐ傍には、無理から娘に半座を分けた迂散らしい若者、——横にころりの狸寝も、何か狐のたくみ事、——一口淨瑠璃をそのま前に、もしも因果の絲がもつれもしたならば、その離合集散は正三が工夫の廻舞臺ならでは、よも収まるまいな

どと考へ出した時、彼方の堤の上をえいえいと力聲しぼつて曳きゆくは上り船ではないか。

血肉を啜つて因縁を引くといふ、そちも未來永々小市と縁を引く盃とて、釣花生に喜蝶の血を盛つてやりながら、盃に手をささねば敵の娘の嫁人といふでもない。それ、その鎖でと願で教へて、鎖をひき寄せさせる。縁の鎖の引く盃、取次もせず、手もささず、鎖で引くが二世の結びと。二人の思ひも叶はせやり、敵討の手懸もつけおほせ、さて——敵討も、家國も、此の上り舟の工夫こそと思ひ昏らしし此の年月、その通りに舟に綱を付け、川端を引き上らば、米穀萬事運送は思ひの儘——と、あれをも、これをも大團圓に運び來る手腕は、さすが『三十石艦始』の作者ぞと思ひ出づれば、段々と遠のいて行くえいえい聲も、何とはなしに惜しまるる。

けれど同じ狂言趣向に頭を悩すとならば、私はこの乗合舟をそのままに、ただ漢口の世界と決めてかかりたい。衆客争鬧の間に、別れともなき二人。一人は、松江の市に「年老いて兒なし、出賣人に與ふ。父となす、ただ身價十兩。願ふ者は即日交を成さん」といふ招牌を掲げて、子たるべき者を求めた老翁、「人は幼にして孤、今此の翁を將て、茶を捧げ、水を獻じ、我一點の孝心を盡しなば、我爹娘の魂魄必ずや他の身軀に附着し來りて、受享するであらう」と、其の翁を買うて、親とかしづく若者。しかも眞の親子とは知る由もなく、交はす辭も、人が早う帆を揚げよのわめき聲に消されて悄然と別れる。まづ二人の身の過ぎこし方、成り行きを、ここに暗示

し、ここから發展させたい。それには、漁家蟹舎、楊柳綠樹の書割を何に據つて作りなすのがよいであらうなどと、心の拘欄の組立に、急しい時、何の、それは『巧園圖傳奇』の筋でなかつたかと心づけば、をかしいやら、情ないやら。

といへば、九月十三日にはまだ一月の間があると、規定通りに横苦切らぬ舟は、胴の間の中程に座を占めた私にも、ありありと月の流れ行く影も、岸の堤の一むら蘆、たえては續くずとのさき迄も、ほんの一目に眺めさせたのを、かの侍が中間に酌させる瓢箪酒のほろ酔減に、折柄眼ざました俳諧師と浮世話の頻りはづんで、頬と頬とがすれ合ふほどに寄り添へば、私の見る眼の界は狭められて、ただ正面の景の見ゆるばかり。さりながら、其の景は苦と絃と二つの肩とが劃する自らなる框のうちに、天然の繪を描き出すではないか。ほんにまあ、李笠翁が西子湖濱に浮べたといふ一隻の湖舫。周圍は板のうへを灰布を蒙らせて、一隙の光をも露させねど、左右には二つの便面、木を用ゐて匡となして、上下は皆曲に、其の兩旁を直うした二つの窓を切り開いてある。その舟の中に坐すれば、兩岸の湖光山色、寺觀浮屠、雲烟竹樹、往來の樵人牧豎、醉翁游女、連人帶馬、盡く便面のうちに入りて我が天然の圖畫をなす、且又時々の變幻、一定の形をなさず、一櫓を搖せば一象を變じ、一篙を撐せば一景を換ゆるといふ趣を偲はせるではないか。

さきには繪巻物を思ひ、引道具を思ひ、今は纜繋げる時にも、風搖れ水動けば、亦刻々形を異にして、一日のうち百千萬幅を現出すといふ湖舫の事を思ふ。舟は流れにまかせ、身は舟にまかす幾時かの徒然は、私に、あれを思はせ、これを偲はせて、兎角眠もならぬ程、やや更くる夜風の、秋を動す寒さに、袖疊みにして置いた對の奥綺の羽織を、さらりと肩に掛けば、昨日訪ねた詩仙堂の風氣も、香の煙も、なほほのめく心地がする。

琴瑟を移して世氣を盪ふといふ園外の松聲、冷然として耳根を爽かにするといふ岩牆の瀑の響、密林には霜氣

遅しと、かねてきけば、池邊の紅葉に恨みつらみはいはねど、待たるは、影は江湖の景を吐いて、欄に凭れば舟に在るかと思はすとうたはれた水の面の月。凹凸窠の十二景勝、その四つを數へ來りて、残る八つを、夕暮の霽の心憎さは、ありやなしやとおぼめかすも、今は亡き世の主、八秩の碩老、三陽の逸民、六々山人の心根を象の上に於て取れといふのか。風寒くば肺癆のなやみ、天晴れなば一條の枯葉、歸りては牀に安臥する自適の人が、水を動せば魚は手に依り、園に立てば蝶は肩に止る面白さ。それをうち偃びながら、そぞろ歩きした昨日の私は、詞友羅山と往復した論ひの煩はしさも忘られて、風雅新に開く凹凸窠と、楣間の三十六詩偈の額を仰ぐその人と喜びの聲を合はせた。愁る莫れ、歸路前村の昏るを、頼に今宵新月の明有りと、新室宴に集ひたる文賓詩客をその人と共にひきとどめた。大阪落城の後も、餘孽殘黨のいつ驅扇するかも計り知られねば、自ら游偵として竄れたるなど、誰やらがさかしら言も忘れて、むかしは陳眉公、今はその翁の遺愛の琴に聲あれと耳傾けた。さらさらさつと玉を轉ばすは、九重の上にもみ心よせられた七の絲の調か。朝な夕な、愛での餘りに力のかぎり拭ひやつたといふ吳竹の竿を傳ふ露の雫か。それとも日本の李杜が清逸の風格であらうか。

此の堂を訪らふ人々のうちに、とりわけて足繁きは、孤松井に五柳、別に一山川を置くといふ都勾墩の主であつたらう。晉の徴士の名をよびて、おのが志を擬し、さては操る業知らぬ琴を置きて、緒のたえ行くままに無絃の琴に似ると、誇りかにいふ舉白堂の主であつたらう。三人相集うて語る所は老莊虛無の理か、語り終つて三人共に笑ふ。そのうち一際高く響くは、この主人のそれか。竹節の大如意を手にし、侍童に偃月刀を擔はするさきの武人はさうもあらう筈。

ここの主は武人である、舉白堂主亦武人であつた。されどかの信長がうたふ小唄の——死なうは一定、忍び草には何をしようぞ、一定かたりを残すもの——のあはれさ。死に行く人、亡び行く國を見るわびしさ、今日は人

の上に、明日は我が身の上に迫らうはかなき。それを人は一代、名は末代と功名にまぎらはせ、あるは小唄三昧、幸若の舞三昧に忘れようとする滔々たる時流の武人輩と、行蹤を共にするには二人は餘りに醒め果たるを如何せう。しかも世を憂しと觀じて直に彌陀の名號を誦しつゝ瞑目せんとするには、また棄て難きこの世の相の面白さを如何せう。さりとて住むに煩はし、紛擾裡に立つに煩はし、その煩はしさのみを除きたるこの世わが世の、其處には許由巢父の住む境がある。李白杜甫の詩境がある、桃花源の仙境がある。かうして眉うち顰めて世より逃れ来る二人と、洛閩の學を唱へながら、漸次に唐土高士の風に身を涵したる都勾墩主とは、當然ここにおち合ふべきでなかつたか。

しかしながら、都勾墩の主惺窩が、保津川を下りて、その勝景にあふ毎に、浪花隈、流六溪などと名づけながら、なほ感興を托するに和歌の體を以てしたるを思ふ時、舉白堂の主長嘯子の住める獨笑亭には、唐の文一千五百卷を集め置きて、かれこれをたどり讀むに、ほのぼのの心ゆく卷々の所に至りて莞爾として獨笑すといふが、これと共に、代々の勅撰集、歌合の類、物語冊子の品々、家々の集、大約二百六十部を秘めて、靜かなるうちのもてあそぶものとすと云ふを思ふ時、王右軍が石ずりの跡、殊更に學ばねど、そこはかとなく眞草うち交ぜ亂れ書くと共に、村童等がこれはこなぎが花、これはさみたづまなどの答に耳傾けて、歌などに讀む物なれど慥に知らざりつるを、畏くひてける哉と心一つに嬉しがるを思ふ時、中古以來の歌人または歌の趣が創り出す境にある世捨人の心ゆきも、如何に強う此の人々を動かしたかを推すべきであらう。さればこそ、里の兒と共に椎を拾うては數ならぬ身を歎き、やよいぎ櫻の名を呼ばれてにこと笑ふときく時、私は六十の翁と十六の小童と相伴うて、つばなを抜き岩梨を取つた昔の人の上を聯想せずには居られぬ。外山の奥を訪うての歌、朽ちもせぬ世の形見となりけり昔隔てぬ庭の岩垣——の決して偶然ならぬを思ふ。しかもかれは折に觸れて花紅葉を求め

ても家苞いへづととすると共に佛まふけに奉らんとする人、無言をせざれども獨居ひたりせれば口業修めつと喜ぶ人、これは家遠し、遅きをはかりて食ふべきもの、女の童わらはしておこす、前に据すゑもあへず、ただ躑躅岩つづじいなし裂に眼をかく。家に歸れば待ち時過ぐといひ騒ぐ。險しき道に惑ひて常よりもいたう困こまじたれといへば、そはみ心にこそあれとて、ふし轉まろび笑ふ聲のうちに、己おのれも笑ひを交かはす人である。この世より隠るとはいへ、慶元けいげんの人は遂に慶元の人である。一人は三十六詩仙の額を掲げ、一人は四人宛を九枚の額に彫りなして歌仙堂に掲ぐとも、そのけぢめは畢竟和歌と漢詩のうへにあるばかり、期する所はつひに同一様。この様にしてあの三人は、自らあの三人の時代の中にのみ活きる。慶元の人々と、建曆けんりやくの二歳彌生やよひの晦日つごもひ比に筆を擱く人とは、確たるけぢめを有す。そのけぢめはまた慶元と明和との人の間に於て認めざるを得ぬ。

一昨日をたとひの嵯峨野さがのあたりの逍遙せうようの折、ふと見かけた事であるが、數奇すきを凝こらした酒樓の門柱もんばしらにかけられた聯の十四文字。釀成春夏秋冬酒、醉倒東西南北人とは誰がさかしら事と問へば龍草廬りゅうそうろうのすさびといふ。これはもとより治平の世の閑技。同じ唐土たうどの風を移し、同じ唐土の文字を襲用するにしても、あれとこれとは斯くも違ふかを思はねばならぬ。それは決して鶯ういすをきいて、形も、聲も、毛色も倉庚そうかうに似ても似つかぬものなる事を嘲あざわる人が、櫻はただ我が邦に於て見るべく、櫻はユスラモモなるを知つてか知らないでか、庭に櫻の花多きを食つたを訝いぶるが如き名物の末すえに就ついていふのではない。それは決して都勾墩とこうじゆんの都勾樹とこうじゆも、蘇鐵そてつと檳榔びんらうとの異名を混淆したのを笑ふ程の輕さに於ていふのではない。

思ふ所漸く理に沈まんとする時、櫓聲ろこゑに月影を碎いて漕ぎ來る小舟の二艘三艘。これが枚方ひらかたの名物。雞掌きしやうが、夜すがらくらはぬがさぞ御耳障りと伺ひ申せば、——くらはんかくらはんかにはあらねども、喰ふ蚊に飽く淀とどの明ぼのと詠ぜられた烏丸大納言殿の飄逸へういつは、その君のもののせられた『仁勢物語』同様、この世の煩わづはしさ、もの

憂さを笑にまぎらせたものでないかと、彼のきいた風な若者が煮しめに顔を顰めながら、和國辨當の通をふりまはすを聞き流して、折柄の興に入る。

いつ寐込んだとなく寐込んだ耳元に、さあ「錢置いて行かんせ」のわめき聲。河掘が助力を頼む柱本に舟はかつたのである。彼の侍が俳諧師の言葉にけぶな顔して巾着の紐を解くを、道頓堀者が狸寐入。それをさき程迂散らしかつた男が正直に揺り動すに、わざとの欠伸まじり、不承々々に小錢とり出すを、侍と中間とが顔見合はせての嘲笑。上り下りの船の中にきまつて一人二人はある可笑しさである。

これに眼が冴えた今、ふとかういふ事が胸に浮ぶ。長嘯子ならぬ、丈山ならぬ私、明和の私は、如何なる心ゆきを以て此の人の世に立つべきかと。此の私の行き方を私に問ふは朱に朱を尋ねると同様、そもそものが沙汰の過ぎり。とはいへ、早く眞の私を揺り起せる様に櫓拍子に合はせて、棹の突張り加減に合はせて、身は横様にゆらぐ。流を下る心地よさはするすると淀みもしらぬ船足に、内省の絲をたぐり出せと様に唆かす。兎に角にも何か考へずには居られぬ船の態である。

眼られぬ手合は何かくどくと話し合せて居る。孫に虎屋の饅頭せがまれたと、切手取り出して見せる京の女、道頓堀に評判の吉田玄水の盲八人藝を見たと仕方話しのあの迂散男、そのうちに皆の者の眼は、耳は今流行の心學者もどきに、手つき身振をかしう語り出す道頓堀者の話に釣り込まれて了ふ。

京の祇園町の花數々咲き亂るる其の中に、佐渡島松之丞として碁盤人形の時分からのぱりつき、今は若女形となつて額の紫帽子に何やら床しき可愛らしさ。誰では嫌とは云はぬ舞臺顔、江戸の芝居からも相談ある程に、菊之丞、富十郎よりも高い千五百兩の給金、海老藏の清水清玄を向ふに廻しての櫻姫の可愛らしい色氣のある舞臺風にとつと評判高く、品員々々の、本町通の呉服屋の後家が衣服仕入してくれる。麴町の大名貸の娘が金銀さは

に呉れるといふ始末。さて京に戻れば久しぶりぢやと顔見世からの大當り。大阪に下れば、やれ松が下る下るとの噂に、炭百俵、伊丹樽五十、絹幟十五本などと積物の數々、番附にして賣りあるく。北脇の隠居はさる方よりと書付して一間四方もある火桶を送らるるも大當りといふ古めかしながら、滅多無性の最辰。さてその後、江戸に下りて、相の替り、海老藏が子の團十郎清水清玄ぢやといへば、松之丞は心の内で、おれが櫻姫であらうと思ひ、それはよう御坐りませうと挨拶する間に、頭取が役割して見せる、こは如何な事、後室の役なれば以ての外の膨れ面、兎角のごたすたの擧句は休まされ、其の上樂屋の異名に八人連が何をいふ事ぞと皆が鼻であひしらふ。二の替にも役はなく、暮の顔見世にも誰もいうて來ず。是は面妖な、俄に下手になる物でなし、是は濟まぬ濟まぬと髭撫でさすり、ちつと抜かうと鏡臺とりよせて、つくづくと我顔を見れば小皺だらけ、頬骨も荒れ、白髪交りの髭面、我ながら昔のゆかり何處へやら、思うて見れば海老藏が清玄の時、おれが二十六の歳。今から繰つて見るに今年丁度二十八年。ヤアとはじめて氣がつく。聞きふれし古歌にいふではないか。老いぬれば八人連となりけり、年はよつたり、皺はよつたり。

「如何ぢや、皆の衆、何と可笑しい話ではないか。己惚れと何とやらではあるが、その己惚をきつぱりと止めて欲しいものぢや」

と、おのが話上手を小鼻のさきにうごめかする自慢顔。それがをかしいと皆が笑ふ。話の中にわざと引き合ひに出した文七の鼻にかけて尻をちと早くいふ聲色、歌右衛門の氣張りてただ口先で物を早くいふ白廻しを、また詠へては笑ふ。私も笑はずには居られぬ。それは今年新板の、大阪も大阪、とつと真中の住人と名乗つた増谷大梁が『世間化物氣質』の中の一小話。あの聲色身振は今も飛ぶ様に賣れるといふ『聲色指南歌しらべ』を懷に潛まして居ると目星が附いたので。

ふと私は笑ふに笑はれなくなつた。これは單なる高慢に對する教訓であらうか。己惚が齷らす滑稽談であらうか。慘たる顯顯の秋霜は五十四年の今、鏡面の一瞥に見て取る事が出来よう。額上の皺波は八人連の異名と共に知る事が出来よう。けれど染めて白きに至らず、刻みて深きに達せぬ昨日から今日へかけて、そろそろと忍び来る老齡と廢顏とは何によりて見、何によりて知る事が出来ようぞ。然しながら、人は日毎に衰へて行くを如何する。忽微に刻秒に老いて行くを奈何する。彌陀の來迎といふ冥加話も、たかが賣僧の竹田機關とのみ聞き流す私には、かの利那をわれ生けりと悟り、この利那をわれ生くと覺えるばかり。この利那はつぎの利那に移り、そのまた次の利那に繋つて行くそのはては、ただ死といふ大門が開かれて居ると知るばかり。泣けど叫べど、其の門の柱にしかと抱きつけど、遂に木津川と淀川との落合に、それと知られぬ、目に見えぬ大まかな緩やかな渦の中に木の葉が吸ひ込まれる様に、いつか私といふ姿は消えて行く。長嘯子はいふ、死はめでたきものぞ、再び彼の故郷へ立ちかへりて、始もなく終もなき樂しびを得ると。けれど此の樂しみを知らざる輩が、臨終の際に泣くならば、これの利那よりかれの利那に移る利那を何故泣かぬ。此の世かの世の境に立つてはじめて號ぶとよりは、何故に昨日と今日との境にありて號ばぬ。

江田世恭のもとより借り來た一夜一夜、巻を措く事が出来なかつた『花屋日記』。元祿七甲戌十月十二日申の申刻、御年五十一歳にて埋火の冷むるが如くにして、遂に屬曠に就れたとある芭蕉翁が、死にさき立つ四日、次郎兵衛が傍より口を潤はすをたよりに、息のかぎり語られたを支考が誌しとどめたその言葉。

昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世。われ生涯いひ棄てし句々、一句として辭世ならざるはなし。もし我が辭世は如何と問ふ人あらば、此の年頃いひすて置きし句、いづれなりとも辭世と申したまはれかし。